

トンブリー朝シャムの王権像とその文献的背景に関する覚書

—転輪聖王と菩薩—

A Note on Concepts of Kingship in the Thonburi Period and Their Bibliographic Sources: Taksin as a Cakravartin and a Bodhisattva

川口洋史

Hiroshi Kawaguchi

1 はじめに

前近代シャム（タイ）において、王権の正統性はまずもって上座部仏教に求められた。王は正法を護持する仏教僧団を庇護することで、正法に基づいて統治する王、正法王（*Th. thammārāt* < *Skt. dharmarāja*, *Pl. dhammarāja*¹）たりえた。同時にそのような王は、僧侶に礼拝・布施して功德を積み、よりよい来世を目指す民衆からも支持を受けたのである〔石井1975〕。

このような王権の仕組みは時代を通して見られた、とりあえずはそう言ってよいのだろうが、一方で時代によって王権のあり方に力点の違いがあったことも指摘されている。

たとえばアユタヤー時代（1351–1767年）の王は転輪聖王（*Th. cakkraphat* < *Skt. cakravartin*, *Pl. cakkavatti*）たらんとした。全世界を正法によって統治する転輪聖王たらんとするアユタヤー王は仏教に対する脅威を排除するために、その支配圏を拡大しようとしたとされる。かかる理念はトンブリー朝（1767–1782年）でも強調された〔Gesick 1976; 1983; Sunait 1990〕。

他方、アユタヤー時代からラタナコーシン朝（1782年–）への変化を強調する議論のなかで、後者の王は菩薩（*Th. phōthisat* < *Skt. bodhisattva*, *Pl. bodhisatta*）を自認したことをワイアットやニティが指摘してきた〔Nithi

1980: 50-65; 1984 (1982): 240-241; Wyatt 1994 (1982): 152]。ただしここでは菩薩たる王（菩薩王）が何を意味していたのかは必ずしも明らかにはされていなかった。この点をさらに掘り下げたのがサーイチョンである。

氏によれば、アユタヤーからトンブリーの諸王は、「呪術的」で「超自然的」な仏教を好んだため、誇大的な転輪聖王思想を重視した。しかし18世紀における社会的・経済的変化のなかから生まれたラーマー一世王（1782-1809年）をはじめとするラタナコーシン朝初期の支配者層は、「合理的」で「現実的」、「人間的」な思考を重んじたという。彼らにとって転輪聖王は非現実的な存在であった。むしろ一世王は、菩提に至るために智慧を備え、民衆に慈悲を垂れ、俗人と僧侶とが仏法を理解させるべく努めた菩薩であるとともに、十王法²をもって人々を統治するという「持法大王（*Th. thammikarāchāthirāt < Pl. dhammikarājādhirāja*）」であったと論じた³。

氏の議論は野心的であると言ってよい。しかし、氏の二項対立的な枠組みでは理解できない史料があることも事実である。ラタナコーシン朝初期において転輪聖王がどのように捉えられていたのか、それと菩薩としての王（菩薩王）とがいかなる関係にあったのか、という点については、なお検討すべきところが少なくないと筆者は考えている。もとより菩薩とは自由自在に意味付けが可能な存在である[杉本1993: 193-195]。前近代シャムにおける菩薩としての王の意味を考えると、三蔵・蔵外、パーリ語・タイ語を問わず、シャムで通行していた仏教文献を広く視野に入れなければ、それを精確に理解することはできない。

そこで前近代シャムの王権思想の研究における仏教文献の扱いを見るに、多くはパーリ語三蔵（の現代語訳）やタイ語の仏教文献によってモデルを構築してからそのモデルに基づいて史料を解釈する、というプロセスを採ってきた。転輪聖王思想であれば、長部經典の「転輪聖王獅子吼経（*Cakkavattisihanāda-sutta*）」や「世起経（*Aggañña-sutta*）」、『大史（*Mahāvamsa*）』、タイ語仏教文献の『三界経（*Traiphūmikathā*）』⁴などが[Tambiah 1976: Ch. 4, 6; Gesick 1976: Ch. 2; Suanait 1990: Ch. 3-5]、菩薩王

思想であれば「ヴェッサンタラ・ジャータカ」[Jory 2002] や『三界決定論 (*Traiphūmilōkwinitchayakathā*)』⁵がモデルの構築に利用されてきた。参照されてきた仏教文献は限られていると言わざるをえない。そのためかかる手法では、ある時代の王権思想が実際にいかなる文献に由来していたのかを知るのは困難である。むしろ伊東 [1991] が、シャムの救世主思想の背景に『プラ・マーライ経』を見出したように、史料から出発し、しかるのちにそのよって来たるところを探るべきであろう。要するに典拠探しである。そのような作業を経て初めて王権思想と仏教文献との関係に近づくことができる。

以上から、筆者の目指すところは、サーイチョンが設定した枠組みを離れて、ラタナコーシン朝における王権像、とりわけ転輪聖王としての国王と菩薩としての王という観念と、それらのあいだの関係を再検討するとともに、それらの典拠を探ることである。しかしそのためには、まず先行するトンプリー朝における王権像を整理する必要がある。タークシンは転輪聖王たらんとしただけでなく、菩薩を自認していたことは、史料から明らかである⁶。そのため、トンプリー朝における転輪聖王と菩薩王思想を踏まえておかなければ、ラタナコーシン朝の王権像を精確に位置づけることはできない。

そこで本稿はトンプリー朝における、転輪聖王および菩薩としての王権像を整理することを目的とする。行論にあたっては、アユタヤー時代の王権像との関わりにも若干言及していきたい。くわえてタークシンの王権像に直接間接に影響を与えたと思しき仏教文献を可能なかぎり指摘するつもりである。このような作業をもって、ラタナコーシン朝の王権思想の再考に備えることとしたい。

用いる史料はわずかな同時代史料と、パン・チャントヌマート本『アユタヤー王朝年代記』のトンプリー朝の部分、いわゆる『トンプリー朝年代記』[PRPTPC]である。後者はラタナコーシン朝に入って1795年に成立した官撰年代記であるが、トンプリー時代に編纂された年代記を大きく改訂することなく、継承していると考えられている⁷。だからといって、年代記の記事が事実であるとは限らないのだが、少なくともそこにはトンプリー朝政権が意図

した王権像が反映されているとは言えるだろう。その理念が現実の世界で実際に機能したのか、人々の目にどう映ったのか、といったことは推測によるしかない。しかし当時の政権が理想した王権像を明らかにすることはトンブリ朝の性格の解明や、そこからラタナコーシン朝への変遷の理解へと繋がらざるはずである [Cf. 川口2015]。また、背景にあったと考えられる仏教文献については、その都度説明を加える。

2 転輪聖王

(1) アユタヤー時代後期における転輪聖王

本章ではアユタヤー時代後期の転輪聖王像に触れたのち、転輪聖王としてのタークシンを見ていく。

「転輪聖王獅子吼経」にあるように、転輪聖王は人類の寿命が8万歳のとき現れ、七宝(輪宝、白象宝、馬宝、摩尼宝、女宝、居士宝、将宝)を具有した王であり、武力を用いず正法によって須弥山世界にある四洲すべてを征服・支配するとされる⁸。

この思想は上座部仏教圏の王権像に多大な影響を与えた。スネートによれば、この転輪聖王思想は、上座部仏教がスリランカを経て東南アジア大陸部へと伝播するなかでローカライズされていき、転輪聖王とは仏教を庇護するために武力をも用いて四大洲のひとつ瞻部洲を統一・支配する王へと変化していった。わけても16世紀におけるタウングー朝ビルマ王とアユタヤー王の戦争は、いずれが真の転輪聖王なのかを決する戦いであったという [Sunait 1990]。その他の研究者も、アユタヤー王が支配域を拡大し、周辺諸国の王たちを服属させていった過程に転輪聖王思想の影響を見て取る [Gesick 1976: Ch. 2; Kobkua 1988: Ch.2など]。

ごくわずかししか存しないアユタヤー時代に関するタイ語史料に、直接に王を転輪聖王と見なす記述は乏しいのだが、確かにパン・チャントヌマート本『アユタヤー王朝年代記』には唯一ナレースアン王(在位1590-1605年)を転輪聖王に擬す記事が見える。

すなわち、ナレースアン時代の1594年、ビルマの支配下にあるモールメインのモン人知事サミン・ウパコーンが、シャム側のカーンチャナブリー国主に書簡を送って、マルタバン知事と対立しているため、ナレースアンに帰順することを願い、あわせて援軍を請うた。その書簡には、

私には頼るところがありません。威光と神通力をもって、版図を4つの大洲と周りの2000の小島に拡げていき、[王の] 傘蓋が [人々の] 頭上を覆う [ように] 四洲 [を有する] 転輪聖王マングータル王のように、徳の集まりと大きな栄誉をもつ国王陛下のご威光を頂戴させていただき、軍を進めて城市を守るのを助けていただきたく存じます⁹。

とあって、ナレースアンを転輪聖王マングータルに擬えている。小部経典『ジャータカ』「マングートゥ・ジャータカ」に見えるように、マングータルとは人類最初の王マハーサンマタから数えて7代目の王であり、四大洲だけでなく、四天王天と三十三天の半分を支配した転輪聖王であったとされる [Ja. vol. 2: 310-314 (no. 258); 『ジャータカ』 3: 200-202]。

すでに上記書簡の時点で、ナレースアンはビルマの支配を覆しただけでなく、タヴォイとテナッセリムを奪い、カンボジアの首都ロンヴェークを陥落させていた。その後、チェンマイを服属させ、ビルマのタウンゲーにまで侵攻した。この書簡の内容が後期アユタヤーからトンプリー朝、ラタナコーシン朝初期のいずれかの時点における潤色である可能性は否定できないにしても¹⁰、ナレースアンがかつてないほどの支配域を得るなかで、同時代に転輪聖王と見なされたとしてもさほど不思議ではあるまい。モールメイン知事がナレースアンの威光を頼って帰順する点も、「転輪聖王獅子吼経」と符合している。

(2) 転輪聖王としてのタークシンと文献的背景

同様に、タークシンもまた対外的に拡大していくなかで転輪聖王を自認していた。タークシンは1767年に東部沿岸で旗揚げするや、中部地方に駐留し

ていたビルマ軍を駆逐し、その後3年のうちに群雄を平定してかつてアユタヤ王が支配していた領域を統一した。タークシンの軍事行動は周辺諸国へと及んでいく。71年に華僑の半独立国ハーティエンを落とし、カンボジアを攻めてその王を亡命させ、タークシンが庇護していた同国の王族アン・ノーンを帰国させた。74年から75年には現在のタイ北部に駐留するビルマ軍を駆逐し、チェンマイなどを朝貢国として服属させた。一方、ヴィエンチャン王シリブンニャサーンはルアンプラバーン王国と対立していたため、コンバウン朝ビルマと通じていた。そのためタークシンは74年から75年にかけて、書簡をヴィエンチャンに送り、高圧的な態度でビルマとの通好を断つように求めた¹¹。

ゲシクが指摘したように、このときヴィエンチャン王国に送った書簡においてタークシンは転輪聖王を自称している。1774年12月9日、タークシンは宰相 (akkhamahāsēnābōdī)¹²名義の書簡を送って、チェンマイなどが帰順し、また北部のビルマ軍を討ち取るつもりであることを述べてから、以下のように主張した（下線は引用者による）。

今日、[タークシン王の] ご威徳は、知識と智慧と公平性を備えられ、輪宝と宝剣をお持ちのようであり、畏敬されている。どうして瞻部洲全土における大王がラタナプラ・アンワ都（アヴァ）に対して何か気にかけるであろうか。ラタナプラ・アンワ都よりも大なることこそ、[王が] 意図されてきたところである。[ビルマは王の] 御手から逃れられぬと思われる。今、[王は] 赴いてラタナプラ・アンワ都を取って下僕として使役されるおつもりである¹³。

このように、タークシンが輪宝を持ち、瞻部洲を支配する転輪聖王であり、ビルマの都アヴァまでも攻め取ろうとしていると言う。かかる王権像は、スネートが主張するアユタヤ時代の転輪聖王像とよく似ている。事実、タークシンはアユタヤ王を意識していたようだ。

トンプリーの宰相がヴィエンチャンの宰相に宛てた、1775年5月30日付けの書簡には、

かつてビルマがいまだ侵略しに来ていなかったとき、シーアユタヤー都とシーサツナーカナフット大都（ヴィエンチャン）はそのときひとつであり、美しい宝石を混ぜた金銀のように、樹木の果実と大地をともにすること、不可分一体であった。都の王冠に簪を挿したお方については、最勝なる転輪聖王のごとく恒久であった。一方で、舞姫、側妾、妃も宝玉、十万の指輪、七宝¹⁴、王の財貨をすべて備えていた。俱盧洲の王女が自発的に参じ来たるように¹⁵、四方を統治し、白傘を広げるがごとく、四軍を備えてあらゆる方角に進んだ。[時は]進み、シーアユタヤー都は失われ、王統は尽きた¹⁶。

とある。「都の王冠に簪を挿したお方」はアユタヤー王とヴィエンチャン王双方を意味する可能性もあるが、そこから引用末尾までがアユタヤーに言及していると捉えて、アユタヤー王を指していると考えておきたい。そのほうが書簡の高圧的な姿勢とも合うだろう。アユタヤー王は転輪聖王のごとく、四軍（歩兵、騎兵、車兵、象兵）を率いて四方を統治したという。タークシンはそのようなアユタヤー時代以来の王権像を継承していたと言えるだろう。

1774年から75年にかけて、トンプリー朝とヴィエンチャン王国は外交文書をやりとりするが、結局シリブンニャサーンはタークシンの要求を拒んだ。1778年、シリブンニャサーンがビルマ軍とともに、対立していたウパハート（副王）を打倒した。ウパハート派の残党がタークシンに援助を求めたため、彼は軍を派遣してついにヴィエンチャンを占領するに至った[PRPTMB: 125-129]。

このようにタークシンが周辺諸国を侵略し、帰順させるなかで転輪聖王を称したことについて、ゲシクは、アユタヤーは王が徳を失ったがために滅ぼされたと考えられていたため、タークシンは支配の正統性を確保するためには徳を示す必要があったと言う。周辺諸国を朝貢国として服属させることで、自らが転輪聖王であることを証明することは、徳を示すのに捷徑であったと推測している [Gesick 1976: 101-109; 1983]。ただし、転輪聖王を称した先が国内でなく、国外であったことは留意されるべきであろう。

それでは、このようなアユタヤー以来の転輪聖王思想の背景にある文献とは何であろうか。ゲシクが強調するように、それはまずもって『三界経』で

あろう [Gesick 1976: 49-57]。『三界経』とは、一般にスコタイ時代のリタイ王（在位1346/7-68/74年？）が著したと信じられている、タイ語の仏教的宇宙論文献である。ただし、現存する最古の完本は1787年の写本である。この『三界経』の第5章の大部分、全体の約2割が転輪聖王の記述に充てられている。転輪聖王が現れると、海底から輪宝が現れる。転輪聖王はそれを含めた七宝を具備し、また仏陀と同じ三十二相を有する¹⁷。彼は王族や臣民を率いて、東、南、西、北の順に四大洲を戦うことなく征服する。転輪聖王が行く先々では、諸王が帰順し、彼らに十王法にしたがって統治し、三宝を敬い、五悪を行わぬように教え諭すという [TPK: 99-130]。

この『三界経』の転輪聖王の記述は長部経典「転輪聖王獅子吼経」、「大善見王経（Mahāsudassana-sutta）」、「世記経」に由来すると考えられるが、なお典拠が明らかでない箇所が指摘されている [彦坂2012]。

一方で、シャム人が伝世してきた宇宙論文献は『三界経』に限らない。宇宙論が好まれたのはシャム仏教の顕著な特徴であり、11種のパーリ語宇宙論文献が伝えられてきた [Skilling 2009: 9-11]。特に、先の引用で下線を付したような、四大洲ではなく瞻部洲のみを支配する転輪聖王という王権像の成立と流布を知るのに、これらの宇宙論文献を欠かすことはできない。

それらのひとつ、『世間施設（*Lokapaññatti*）』は、正量部の宇宙論文献がインドからビルマに渡ったのち、パーリ語に抄訳されるとともにテキストを付加されて11-12世紀に成立したものである [岡野1998: 56-57]。『世間施設』では転輪聖王が、(1)「力ある転輪聖王（*balacakkavattirāja*）」、(2)「元来の転輪聖王（*pakaticakkavattirāja*）」、(3)「大転輪聖王（*mahācavattirāja*）」の3種類に分類されている。(1)は瞻部洲のみを支配するもので、アショーカ王などがこれにあたる¹⁸。(2)はマハースダッサナ（大善見）王のように、四大洲を支配する。天界をも支配したマンダータル王は(3)である [Lokapaññatti 1985: 285-299]。

『三界経』は、その序跋にあるように、『世間施設』を典拠のひとつにしている [TPK: 3, 324]。『三界経』において、アショーカ王が瞻部洲を支配した

「小転輪聖王 (culacakkraphattirāt)」とされ、「元来の転輪聖王」やマンダータルのような「大転輪聖王」と対置されている [TPK: 170-171] のは、『世間施設』に由来する記述と考えられる。

他方、14世紀にマルタバンに生まれ、リタイ王の師となったメーダンカラが著した『世間灯明精要 (Lokadīpakasāra)』¹⁹⁾には異なる分類が見える。すなわち、自国のみを支配する「地方を有する転輪聖王 (padesacakkavatti)」、瞻部洲全土を支配する「洲を有する転輪聖王 (dīpacakkavatti)」、そして四大洲を統治する「大転輪聖王 (mahissacakkavatti)」である。大転輪聖王のみが正法王 (dhammarāja) であり、あらゆる王に尊敬される。そして正法王にとっての転輪聖王が正法であり、釈尊こそが正法をもつ無上の正法王だとされる [LDS: 522]。

スネートは、『阿毘達磨俱舍論』を参照しながら、転輪聖王が四大洲の支配者から瞻部洲のみの支配者へとスケールダウンしていった過程を論じている [Sunait 1990: 81-102]。なるほど『俱舍論』は、四大洲すべてを支配する王を金輪王、3つを支配する王を銀輪王、2つは銅輪王、1つは鉄輪王というように転輪聖王を分類している [『阿毘達磨俱舍論』 卷第12 (『大正新脩大藏經』 第29卷: 64-65)]。しかしビルマではともかく、シャムにおいてこのような語彙が用いられた史料は見当たらない。シャム仏教への『俱舍論』の影響も不明である。となれば、『俱舍論』よりも『世間施設』や『世間灯明精要』をこそ重視すべきであろう。

話をタークシンに戻すと、彼が仏教的な宇宙論に強い関心を持っていたのは間違いない。1776年には大臣と法王に三界を描いた絵図を作成させた²⁰⁾。また『三界経』を校訂させたとも言われる [Gesick 1976: 105]。そのテキストがいわゆるリタイの『三界経』なのか否かはわからないが、タークシンが宇宙論文献群に触れるなかで、アユタヤー以来の王の姿としての転輪聖王思想に親しみ、その結果、対外関係のなかで転輪聖王を自称するに至ったという可能性は十分にあるだろう。

3 菩薩王

(1) アユタヤー時代後期の菩薩王

それでは次に菩薩としての王権像について見て行きたい。ここでもまずアユタヤー時代後期におけるそれに触れておこう。例によって史料は乏しいが、『アユタヤー王朝年代記』はのちにプラサートトーン王（在位1629-56年）となるチャオブラヤー・カラーホーム・スリウォンを菩薩として描いている。

彼が母の葬儀のために人を集めていたところ、チェーターティラート王（在位1628-29年）は彼が謀反を計画していると疑った。チャオブラヤー・カラーホーム・スリウォンが官僚らに、自分に助力してくれるか、と問うと、彼らはこのように答えた。

当然でございます。菩薩様がジャンク船の長であったときと同様です。人々が交易に行き、大海の真中で嵐に遭いました。船は難破しようとしています。そこで菩薩は、「このままでは船ごとみな死んでしまう」、と言ってから、「もし私が菩提智（*Th. bōrommaphōthiyān* < *Pl. paramabodhiñāṇa*²¹）を得ることになるならば、ジャンク船を大海において難破させることなきように」、と誓願しました。菩薩の波羅蜜²²の威徳により、ジャンク船は困難を脱し、商売をしに行く国と都市に至りました。このたびのことはこのようなものです。もし閣下が死ぬのに任せるのでしたら、皆もともに死にましよう。もし閣下が死から脱しようとお考えでしたら、皆でともに脱しましよう²³。

ここでカラーホームは釈尊の前生である菩薩に擬えられている。残念ながら筆者は特定できていないのだが、この官僚の発言は何らかのジャータカを下敷きしているはずである。

官僚たちの同意を取り付けたカラーホームは王の弑逆を決意した。決起の日には彼は、

私は菩提智を希求している。もしまことに仏陀の栄達に至るのであれば、[王宮に] 進入して不誠実なものを一掃することになろう。願いの通り成就せんことを²⁴。

と宣言してから、王宮を襲撃し、最終的に王を捕らえて処刑した。その結果、この宣言にしたがえば、彼はいずれ菩提智、つまり悟りを得さしめる智慧を得て仏陀となることが確約されたことになる。菩薩という語は様々に解釈でき、自由自在に意味付けが可能であるが、そのひとつとして「悟りを有する有情、悟りを得ると定まった有情、悟りを求める有情」という定義がある〔杉本1993: 194〕ので、年代記のなかのブラサートーンはまさに菩薩であったと言える。

もちろん、年代記である以上、このエピソードがすべて事実であるとは見なし難い。しかし後述するように、ブラサートーン時代に詠まれたと考えられる詩でも、彼は未来に成道する菩薩として描かれている。そのため、ブラサートーンが同時代でも菩薩を自認していた可能性はかなり高い。

(2) 菩薩王としてのタークシンとその文献的背景

同様にタークシンもまた、年代記その他の史料のなかで明らかに菩薩として描かれた。にもかかわらず、ゲシクやニティはそれに言及しない〔Gesick 1976; 1983; Nithi 2004 (1986)〕。コープクア、ジョリー、サーイチョン、スキリングが若干の史料を紹介している〔Kobkua 1988: 32, 60 (n. 19); Jory 2002: 53-54; Sāichon 2003: 211; Skilling 2007: 189-190〕が、彼が菩薩を称した意味や、その背景にある仏教文献については検討すべき余地が残っている。

パン・チャントヌマート本『トンプリー朝年代記』に見えるタークシンは、転輪聖王よりも菩薩としての側面が強調されている。ジョリーとスキリングも引用するエピソードを紹介しておこう。

1775年、北タイからの遠征からの帰途、タークシンはアユタヤー時代に住んでいたラヘーン（ターク）に立ち寄り、クラーンドーイカーオケーオ寺に参詣した。

〔タークシンが〕僧侶に問われるには、「住職は覚えているだろうか。私がまだラヘーン村にいたとき、私は鐘を持ち上げて、『もし私が未来にまことに悟って菩提智を得ら

れるならば、今私が鐘を打つと、鐘は頭のところのみ砕けるであろう。[そうなれば] 仏舍利を納める仏塔を作ろう』と誓願し、波羅蜜を試した。誓願し終わり、打ち付けると、鐘は頭のところだけが砕けたので、奇跡が一度現れたのを目にした」と。僧侶は「まさにおっしゃる通りであった」と祝福し申し上げた²⁵。

タークシンは未来に菩提を得ることが確定していたことになる。この記述はまさに先のプラサートトーン王の逸話とよく似ている。

両王の宣言文はいかなる文献に由来していたのだろうか。それはまずもって仏伝であろう。『ジャータカ・アッタカター』冒頭の「ニダーナカター」では、シッター王子が出家した際、左手に髪を、右手に刀を持って髪を切り取り、その髪を空中に投げて、もし仏になれるならば、空中にとどまれ、と言った。髪は見事空中に停止したという²⁶。

より有名なのは次のエピソードであろう。菩薩は苦行を止め、スジャーターから布施された乳粥を食べたのち、それが入っていた黄金の鉢を取り、

もし私が今日仏陀となることができるのならば、この鉢は流れに逆らって行け。もしできないのならば、流れに従って行け²⁷。

と言って、鉢をネーランジャー川に投げ入れた。すると鉢は流れに逆らって進み、カーラ竜王の居所に到達したという。

これらの逸話は16世紀にランナーで編纂されたと考えられる『パタマサンボーディ』にも収録されている。同文献は17世紀後半までにアユタヤーに伝えられ²⁸、18世紀半ばには、アユタヤーからスリランカに贈られた仏伝絵写本の源泉資料となるほど、よく流布していた [Appleton et al. 2013: 56-58]。上述したプラサートトーンとタークシンの逸話が、このような仏伝文学を下敷きとしていることは間違いなからう。

ただし『トンプリー朝年代記』において、タークシンが成道を確約されたとする記事は上の一例のみである。むしろ繰り返し強調されるのは、「仏陀の若芽」である彼が菩提を求めてひたすら布施に励んだことである。たとえば

1767年、アユタヤーが陥落した直後、タークシンはチャントプリーを攻略したのち、

そして〔タークシンは〕銀貨と食料を死体埋葬人に下賜し、食料に窮乏して亡くなった人の遺体を探させ、焼かせた。それから〔タークシンは僧侶に〕糞掃衣を下賜し、チョンプリー市内の乞食に銀貨と食料を多く下賜した。それから善を来世の餓鬼たちに喜捨した。〔それらは〕菩提智に至ることへの助縁となすためであった²⁹。

とあって、僧侶と貧民に布施し、その功德を餓鬼となった餓死者に回向している。年代記にはこのような貧民や僧団への布施の記録に満ちている³⁰。

なかでも注目されるのは次の史料である。1768年にタークシンは法王などを任命して仏教僧団を立て直すとともに、庫裏を200棟建設させてから、血肉の布施も厭わないと宣言した。

史料1

もし上人様皆が仏教において律を守り、十分な徳を備えたならば、たとえ私めの肉や血を望んだとしても、私めは肉と血を切り取って布施をすることができましよう³¹

似たような宣言は、1771年から翌年にかけてのハーティエンおよびカンボジアへの遠征を記録した同時代史料、『トンプリー朝行軍日誌』にも見える。

史料2

〔私 = タークシンは〕チューンワイ寺の師匠と多くの僧侶の前で誓願するには、〔次のことは〕私において真実である。身体も生命も顧みずに精励し、何の財産も求めない。ただ沙門、修行者、バラモン、世間の衆生を安楽にし、苦しませず、正しき行いを行わせることだけを望む。(1) [それは] ただ菩提智の助縁とするためである。(2) もし誰かが王位に即き、沙門・バラモン・人民を安楽にさせられるのであれば、この位をその者に与えよう。そして私はただ一人で僧侶の心得を行うであろう。(3) もしそうではなく、頭や心臓や、何かの器官を望むならば、[それを] その者に与えよう。もしこれが真実でなく、私が詐りを言っているのであれば、悪趣に落ちますように」と³²。

身命を顧みず、ひたすら衆生を安樂にし、正しい行いに導くために精勵するのは、ただ菩提を希求するがゆえである。王にふさわしいものがいれば王位を譲って出家するし、望まれれば、頭や心臓を与えることさえ辞さないという。

ジョリーは史料1の背後に「ヴェッサンタラ・ジャータカ」を見出した [Jory 2002: 55]。確かにヴェッサンタラ王子は、求められれば自分の心臓・眼球・肉を布施しようと宣言している [Ja, vol. 6: 486 (no. 547); 『ジャータカ』 10: 155-156]。しかし史料2の由来をこのジャータカだけに求めるのは無理がある。「ヴェッサンタラ・ジャータカ」は、下線部 (3) にある頭の布施に言及していない。そもそもその眼目は妻子の布施であって、王位 (下線部 (1)) や身体器官の布施ではない。同ジャータカの影響力を軽視するつもりはないが、より視野を広くとる必要もあろう。

王位を放棄して出家しようとする物語を『ジャータカ・アッタカター』に求めるならば、「ハッティパーラ・ジャータカ」 [Ja, vol. 4: 473-491 (no. 509); 『ジャータカ』 7: 172-186]、「アヨーガラ・ジャータカ」 [Ja, vol. 4: 491-497 (no. 510); 『ジャータカ』 7: 186-192]、「チュッラスタソーマ・ジャータカ」 [Ja, vol. 5: 177-192 (no. 525); 『ジャータカ』 8: 47-56] がそれに相当する。

それでは頭の布施を記す文献としては何があるだろうか。『大史』には、3世紀スリランカのシリサンガボーディ王が、反乱されて逃亡した際、食事を与えてくれた男に自分の首を文字通り与えて反逆者から賞金を得させた逸話が見える [Mahāvamsa: Ch. 36, vv. 73-90]。13世紀半ばにスリランカで編纂されたパーリ語史書『ハッタヴァナガッラ寺史』では、シリサンガボーディは頭を与える際に、「私のこの頭の布施が一切知性智を得るための助縁となりますように (mam' edaṃ sisadānaṃ sabbaññutañāṇapaṭilābhāya paccayo bhavatū)」と宣言している [Hatthavanagallavihāravamsa: 23; Cf. 藪内2009: 46-47]。杉本卓洲によれば、「一切知性智 (sabbaññutañāṇa—引用者注) というものが、南方の菩薩たちの希求する最終目標になっていることが知られる。これは北伝の仏典の中で菩薩たちの目ざす「無上正等覺 (菩提)」或いは

「仏と成ること」と同じものを指すと考えられる」[杉本1980: 12]。ゆえに、この宣言は史料2の下線部(1)に近いと言えよう。

ただし、『ハッタヴァナガツラ寺史』は写本ではなく、近代のシンハラ文字刊本でしかシャムに伝わらなかったようである[Skilling and Santi (eds.) 2002: 190]。後述するように、タークシンの宣言は広い意味では、このようなスリランカ仏教の一面とつながっていると思われるが、より直接的には、以下の諸文献の影響を受けていたと考えられる。

自己の生命や身体の一部を他者に布施することを「内施 (ajjhattika-dāna)」、あるいは本邦で知られた用語では「捨身」と言う。アーティットは、『ジャータカ・アッタカター』547話のうち、捨身を語るのは7話にすぎず、しかも捨身が必ずしも菩提の獲得と結び付けられているわけではないことを指摘している[Arthid 2008: 774-776]。7話のうち、頭に関するものは「ニグロダ・ジャータカ」だけである。そこでは菩薩である鹿が、妊娠した牝鹿の代わりに王に供されるために、首切り台に登る[Ja, vol. 1: 145-153 (no. 12); 『ジャータカ』1: 165-173]が、史料1・2のように他者にそれを望まれたわけではないし、その行為が菩提のためともされていない。

それに対して、捨身の物語を多く含むのが、パーリ語非古典ジャータカ集の『パンニャーサ・ジャータカ (50の本生譚)』である。同文献は15-16世紀にチェンマイで成立したと考えられているが、実際のところは不明である。ビルマ、タイ中部、カンボジア、ラオスに伝播し、地方語を含めて様々なバージョンが存在する[スキリング2004]。1923年にダムロン親王の指揮のもと、タイ国立図書館がタイ中部に伝わる写本を集成してそのタイ語訳を出版した³³。その国立図書館版は61話からなり、そのうち14話が捨身を語っている³⁴。そこには、ヴェッサンタラのように菩薩が自身や妻子を布施する物語や、その半身や心臓を布施する物語のほか、頭を布施する物語が含まれている。

それが「マハースラセーナ・ジャータカ」である。そこでは菩薩であるマハースラセーナ王は内施を行うことを決意し、求められれば何でも与えるこ

とを宣言した。するとそれを察知した帝釈天が、頭のない青年に変化して現れ、王に頭を与えてくれるように請うた。王は自ら剣を取って、

尊者たちよ、私の〔為す〕喜捨をご覧の神々の集まりよ、この喜捨によって私は、転輪王の栄達や、六欲天における栄達、梵天の栄達、独覚の栄達を望むものではありません。そうではなくて、きっと一切世界の利益と幸福の原因となる一切知性智の助縁となりますように³⁵。

と宣言してから、自分の首を切り落とした³⁶。一切知性智 = 菩提智の助縁のために、という点でも史料2に近い。

そのほか、「シリチュッダーマニ・ジャータカ」は、王がのこぎりでのその半身を切り落として夜叉に与えるという血腥い物語であるが、それに先立って王は、

私は内的な布施を施したいものだ。乞求者たちは外的な布施を乞うている。もし誰かが内的な布施を乞うならば、目であれ、頭であれ、心臓であれ、肉であれ、血であれ、半身であれ、全身であれ、それぞれを一切知の縁として、その人に与えよう³⁷。

と決意している。これも史料2に似ている。

18世紀末から19世紀前半にかけて、シヤムでは実際に自分の生命を捨てる布施行が行われた。アーティットはそれに『パンニャーサ・ジャータカ』の影響を見て取る[Arthid 2008]。同様に、タークシンの菩薩王思想も、このような凄惨な布施を語る非古典ジャータカが背景にあったと考えてよからう。

もうひとつ、可能性のある文献として『十菩薩説示 (Dasabodhisattavuddesa)』³⁸が挙げられる。14世紀後半に南インドで成立し、スリランカで広く通行したパーリ語文献『十菩薩誕生物語 (Dasabodhisattupattikathā)』の異写本が、東南アジア大陸部に伝えられて成立したのがこれとされる[森2015: 102-104]。両文献の内容は同じであり、10人の菩薩がそれぞれ何を過去仏に布施した結果、未来に仏陀となることが確約されたのかを記している。

その一人目、サンカ転輪聖王は、シリマタ仏の弟子に王位を譲り、苦勞してシリマタ仏に出会って教えを請う。仏がひとつの法句を發するや、サンカは、

「世尊よ、このようにあなた方におけるすべての法のなかで、涅槃というひとつの終極が示された以上、私も全身のなかでまさに終極たる私の頭を切断して、あなたの法に特別な供養をしましょう」と言って、頭を爪で切り取って、手のひらに頭を置き³⁹、

サンカは死亡して兜率天に転生した。彼はこの頭の布施によって未来に弥勒仏となることが確定したのである [DBU: 302-306]。『十菩薩誕生物語』では、王は頭の布施が一切知性智の助縁になるように、と誓願している [Dasabodhisattupattikathā: 127]。

そのほか、ナーラダ青年は焼身自殺し、ボーディ大臣は生命を布施している。ダンマセーナ王は老人に王国を与え、また頭をコーナーガナ仏に布施した。マハーパナーダも転輪聖王の位を七宝の1人である居士に譲ったのち、頭をカクサンダ仏に布施した。彼らは皆死亡した結果、過去仏から未来に仏陀となることを予言された⁴⁰。とりわけ後二者は史料2に類似する。このように、『十菩薩説示』は未来仏たちの凄惨な捨身と授記の経験を語るため、『パンニャーサ・ジャータカ』との近縁性が指摘されている [Arthid 2008: 779]。

この十菩薩は早くも14世紀後半にはシャムにおいて知られていた。スコータイ朝のリタイ王が1361年に建てたパーリ語刻文(第6刻文)に言及されているためである⁴¹。

17世紀にはプラサートトーン王を讃える詩のなかで、同王の前世が『十菩薩説示』に登場するパーリレッヤ象 (hatti-Pāḷileyya) であったとされている⁴²。10人目の菩薩のマハーパダーナは過去仏のカクサンダに頭を布施して死に、輪廻するなかでパーリレッヤ象に転生した。彼はいずれ未来にスマンガラ仏となる [DBU: 330-334]。つまりプラサートトーン王は輪廻して最終的にスマンガラ仏として成道するとされていたわけである。ここからもプラ

サートトーンとタークシンに共通点が見られるが、前者がすでに捨身を終えているのに対して、後者はこれからそれを行おうとしているため、より捨身に力点が置かれていると言えよう。

タークシン王の時代、18世紀後半にも十菩薩は知られていた。1781年に清に派遣された使者が詠んだ紀行詩に言及されている [“Nirāt phrayā mahānuphāp pai müang cīn.”: 382]。また、ラーマー一世王時代までに成立したとされる護呪は、『十菩薩説示』末尾の偈文を引用している⁴³。

このように、菩提智のためには頭をも布施せんとするタークシンの菩薩王像は、巷間に知られていた、凄惨な布施を行う菩薩の物語に由来するところが大きかった。畝部 [2013: 50-52] は『パンニャーサ・ジャータカ』に見える捨身の物語に、パーリ語三蔵やその註釈書に見えず、むしろ大乘仏教の論書に共通する文言が含まれており、また物語が形成される過程で利他思想が追加されていることを指摘しつつも、それらの要素を即大乘仏教の影響と見なすことには慎重な姿勢を示している。他方、森 [2015: 102-109; 285-290, 325-329] は、『十菩薩誕生物語』の弥勒伝承について、上座部の伝統的な伝承や上座部の菩薩思想一般と比較して、まったく異質・異端の、非上座部的なものであると評価しつつ、同文献の成立に14世紀南インドの大乘仏教の生き残りやヒンドゥー教が影響した可能性を指摘する。いずれにしても、シャム仏教が含む非上座部的な部分、パーリ語三蔵や註釈に由来しない要素こそが、菩薩王の胚胎に不可欠であったと言わねばならない。

(3) 菩薩王の歴史的背景

それでは菩薩としての王権を強調せしめた歴史的な背景とは何であろうか。先にも触れたが、『トンプリー朝年代記』では、アユタヤーが滅亡したのち、人々が困窮するなか、タークシンは財物を人々に分け与えたことが強調されている。たとえば、トンプリーをビルマ軍から奪還したのち、

小暦1130年子年成就年 (1768年)、災厄に至って、(1) 飢餓・匪賊・病気が山のように

集積したために命を落とした人々の骸骨を〔タークシンは〕目にされた。そして食料を欠いて苦しみ、醜い餓鬼のような身体をした民衆を見て、王位に疲れを感じられ、〔トンプリーを捨てて〕チャンタブリーにおいてになろうとした。そこで沙門・バラモン・教師・大臣・人民はともに〔翻意を〕懇請し申し上げた。(2) 仏陀の若芽たる国王陛下は菩提智に至ることへの助縁となる効用をご考慮になったため、奏請を受け入れた。そしてトンプリーの屋敷においてになって留められた。

それ以後、俗世と仏教に慈悲を下し、心を砕いたため、〔タークシンは〕働きによって睡眠や食事、水浴も楽しまなかった。(3) 王族・沙門・教師・大臣・民衆・乞食・貧民が全土に満ち溢れ、下賜を受けるものは1万人を越えた。一方、タイ人と中国人の武官文官は1人が20日食べられる精米1タン⁴⁴を受け取った⁴⁵。

とある。下線部 (1) は「転輪聖王獅子吼経」の註釈や『世間灯明精要』に見える、3種の中劫（壊劫に至らないあいだに起こる世界の滅亡）を踏まえた表現である。すなわち、貪（lobha）の増大によって人々には飢餓による中劫（dubbhikhanarakappa）、瞋（dosa）の増大によって刀による中劫（sattantarakappa）、癡（moha）の増大によって病による中劫（rogantarakappa）が現れるとされる [DNA, vol. 3: 854; LDS: 512]。そのような悲惨なときにあつて、タークシンは臣民の要請を受けて人々の救済を決意する。それは彼を菩提へと至らしめる要因でもあった（下線部 (2)）。救済とは具体的には、人々に布施を施すことである（下線部 (3)）。

このように年代記には、タークシンが自らを省みず、貧民や僧団に米や銀を与えたことが繰り返し語られ、しばしばそれは菩提を得るための助縁となすためであったと記されている⁴⁶。タークシンが民衆に財貨や食料を配分することでその勢力を増していったことは、フランス人宣教師に由来する記録や、ハーティエンに割拠していた鄭氏の家譜にも見える [Turpin: 339; 『河僊鎮叶鎮鄭氏家譜』: 102] ため、まず事実であったと言ってよい。

ニティが論じたように、アユタヤーが滅亡したのち、経済的社会的に混乱するなかで、人々は自衛のために種々の集団を形成していった。タークシン集団もまたそのような集団のひとつであったという [Nithi 2004 (1986): Ch.

2]。タークシンが集団をまとめあげ、その勢力を拡大しえた要因のひとつが、上記のような人々へのさかんな財物の布施であったものと考えられる。

もちろん、彼の布施によってどの程度の民衆が救済されたのかは不明である。しかし少なくともタークシンがそのような姿をアピールすることで、人々の支持を取り付けようとしたのは確実であろう。そして、このような布施行の延長に、身体器官でも何でも布施して菩提を目指すという捨身の菩薩があった。タークシンは弥勒を自称したことはないが、人々は頭を布施したこともある弥勒に彼の姿を重ねあわせたかもしれない。そうであれば、シャムでは弥勒は広く救世主として理解されていたこと〔伊東1991〕を考えあわせると、救世主としてのタークシンの名声は否が応にも高まったであろう⁴⁷。

4 ラタナコーシン朝の王権像再考に向けて

(1) 小結

時系列にしたがって、タークシンの王権像の展開と、その文献的な背景をまとめてみよう。1767年にアユタヤーが滅びたのち、タークシンは人々に財物を与えつつ、支持を得て勢力を拡大した。ときに自らの身体器官をも布施して菩提へ至ろうとする姿は、『パンニャーサ・ジャータカ』や『十菩提説示』に見える残酷な布施行の物語の影響を受けていた。同時に、極度の社会的・経済的混乱のなかでは、救済を欲した人々に求められた王権像であったものと考えられる。

3年ほどで、彼は群雄をすべて平定してかつてのアユタヤーの支配圏を回復した。1775年までに北タイからビルマ軍を駆逐した。年代記には1775年2月に、タークシンが輪廻のなかでいずれ菩提智を得るであろうことが確定されたという逸話が挿入されている。それ自体は、アユタヤー滅亡以前の出来事なのだが、それまでの身命を顧みない布施行の結実としてシャムの平定が成ったために、この逸話がこの時期に挿入されているのかもしれない。

成道が確約された王として、タークシンのほか、プラサートトーン王がおり、その背景には「ニダーナカター」や『パタマサンボーディ』といった仏

伝文学が想定される。ただし、トンプリー朝の菩薩王思想は、そのようなアユタヤー以来の王権像を受け継ぎつつも、菩提を目指して、捨身を含めた布施行に努める点が強調されていた。

他方で、1774年から75年にかけて、北タイからビルマ軍を追い出し、同地を朝貢国に位置づけ、ビルマとヴィエンチャン王国との連携を阻害しようとするなかで、タークシン政権はヴィエンチャンへの書簡の中で、彼を瞻部洲全土を支配する転輪聖王に擬えた。それは政権が主張したように、アユタヤー時代を意識してのものであったと言ってよい。『アユタヤー王朝年代記』でも、ビルマとの戦いのなかで、ナレースアンを転輪聖王に比した記述が見える。このようなアユタヤー以来の王権像には、「転輪聖王獅子吼経」や、それを源泉資料のひとつとする『三界経』に見える、四大洲を征服する転輪聖王の記述が背景にあらう。ただし、『世間施設』や『世間灯明精要』といった宇宙論文献が、瞻部洲のみを領有する転輪聖王像の形成に影響を与えた可能性は考慮されるべきである。

同時に、本稿の考察によって、トンプリー時代における転輪聖王像と菩薩王像に直接間接に影響を与えた仏教文献が明らかとなった。その多くが三蔵外の文献であり、これまで歴史研究が顧みなかったものであったことは強調されねばならない。

さて、サーイチョンは転輪聖王を「超自然的」で「人間には到底なりえない存在」と見なし、一方で菩薩を「合理的」で「人間的」と捉えて、両者を二項対立的に評価した。本稿はそのような観点から王権像を理解することを目的とはしていないが、氏の評価基準に従うならば、トンプリー時代の菩薩王は「超自然的な信仰」に属し、「合理的」な思考と対立するものであったと評価しなければならなくなる。なんとなれば氏は、18世紀末に実際に行われた捨身行をそのように評価しているからである [Sāichon 2003: 109-110]。

かかる評価はともかくとして、トンプリー時代に転輪聖王としての王権と菩薩としての王権がいかなる関係にあったのだろうか。これを明示する史料はないものの、両者がある点に基づいて対立していたとまでは言いがたい。

むしろ、菩薩はタークシンが民衆を救済しようとする姿であった一方で、ビルマを視野に入れつつ、対外的に拡張し始めると、その転輪聖王としての側面が現れてきたところから、菩薩はタークシンの対内的な、転輪聖王はその対外的な側面をそれぞれ反映していた、というのが穏当な理解ではあるまいか。

(2) 『三印法典』「プラタンマサート」に見えるマハーサンマタ王

このようにトンブリー時代の王権は菩薩と転輪聖王を兼ねていた。ところが、代わってラタナコーシン朝では、王はもはや転輪聖王ではなく、菩薩たらんとしたというのが先行研究の説くところである。同王朝における王権像については、その文献的な背景を含めて別稿を用意しているが、ここでは問題提起としてひとつの史料を挙げておきたい。それはラーマー一世王が1805年に編纂させた『三印法典』の総序たる「プラタンマサート（法論書）」に見える、マハーサンマタ王の伝説である⁴⁸。

その概要は次の通り。「世起経」にもあるように、世界が初めて形成されたのち、梵天（ブラフマー）がそこに降り立った。彼らはやがて梵天の姿を失い、男女の別を生じ、子をもうけ、村を形成していった。

そのとき、(1) 菩薩様が賢劫⁴⁹の始めに大いなる人として生まれた。しばらくして互いに争いが生じたが、誰も統制するものがいなかった。群衆はみな集まって、大いなる人を王に就け、〔彼は人々の〕長となった。名をマハーサンマタ王といい、(2) 七宝7つを具備し、(3) 4つの大洲を統治した⁵⁰。

マハーサンマタは四大洲をすべて統治したが、その死後、世代を経るごとに国家が分裂していき、ついに101の言語集団に分かれていく。この人類最初の王マハーサンマタに仕えたマノーサーラは、当初公正に裁判を行うが、判決を誤ってしまう。職を辞して修行に励んで神通力を得、世界の果ての鉄圍山に飛んで行って、そこに刻まれた法典「プラタンマサート」を発見する。それを暗記してから帰り、法典を編纂してマハーサンマタ王に説いた [KTSD,

vol. 1: 9-18]。

このように「プラタンマサート」冒頭部分の眼目は法の起源なのだが、いま重要なのは上記の引用である。下線にあるように、マハーサンマタは釈尊の前世としての菩薩であり、七宝を持って四大洲を統治する転輪聖王であったとされている。

上記引用についてサイチョンは、このような考えは長らくタイの王権思想の基盤にあったとしつつ、アユタヤー・トンプリー両時代には転輪聖王思想が重視されたのに対して、ラタナコーシン朝では菩薩王思想が重んじられたと主張する [Sāichon 2003: 227-228]。

しかし、『三印法典』以外のタイ語文献と、シャムに伝世したパーリ語文献において、マハーサンマタが転輪聖王であったとする記述は見られない。一方、マハーサンマタが釈尊の前世たる菩薩であったのは、長部経典「世起経」に対するブツダゴーサ（5世紀）の註釈 [DNA, vol. 3: 870] から始まる。シャムでも『三界経』や『世間灯明精要』に継承されており [TPK: 306-307; LDS: 162-163, 509-510]、ごく一般的な見解であったと言えよう。しかし、それらにおいてマハーサンマタは転輪聖王とはされていない。

サイチョンは、1802年に成った『三界決定論』が、アユタヤー時代に編纂されたパーリ語の宇宙論文献『ローカサントーナジョータラタナガンティー』を引きつつ、マハーサンマタは「あらゆる国々と大地を征服するために、すこぶる威力を備えていた⁵¹」と記していることをもって、シャムにおいてマハーサンマタが長らく転輪聖王と見なされてきた証拠とする [Sāichon 2003: 227]。しかし、仮に『三界決定論』のその一文が転輪聖王を暗示しているとしても、それが『ローカサントーナジョータラタナガンティー』まで遡るとは言えない。同文献は1520年から1747年にアユタヤーで編纂されたと考えられている [Suphāphan 1990: 484-490] が、そのマハーサンマタに関する記述は『世間灯明精要』をそのまま引用している⁵²。したがって同文献にマハーサンマタが転輪聖王であるという記述は存在しないし、先の『三界決定論』の一文もない。今のところ、その一文は『三界決定論』著者による文飾と言わ

ざるをえないのである。

他方で、「プラタンマサート」自体の源泉資料について、ナイ・パン・フラはマノーサーラの出自を根拠に、それをビルマ語からモン語に訳された法文献、*Sla Pat Dhammasāt Paḍai Lakthak Smin Sāmanta* (『サーマンタ王時代におけるダンマサートの貝葉写本』) 系統の文献に比定している [Nai Pan Hla 1991: 31-32]。ただし氏が収集したモン語法文献の英訳を見る限り、*Dhammasāt Manu Rasi Roni* (『マヌ仙人のダンマサート』) も「プラタンマサート」のソースのひとつであったようだ。上記引用下線部(2)と、続く101の言語集団への分裂はこの系統の法文献に由来するものと考えられる [Eleven Mon Dhammasāt Texts: 593-594]。ただしそこに下線部(3)の七宝を具有するという文言は見られない。また、四大洲の支配も、転輪聖王を意図しているというよりも、人類が101の言語集団へと分裂していく前提として述べられている印象を受ける。

『三印法典』より古いタイ語の「プラタンマサート」は現存しない。そのため、いつ下線部(2)がそこに組み込まれたのか、いつ(3)が加筆されたのかを知ることはできない。『三印法典』が編纂されたときかもしれないし、それより前かもしれない。しかし仮に後者であったとしても、一世王政権はマハーサンマタを転輪聖王とする、かなり特殊な文言を削除しなかったことになる。

結局、シャムにおいてマハーサンマタを菩薩と見なすのは一般的であった一方で、それを転輪聖王と考えるのはかなり珍しく、1805年に始まった可能性すら残されている。「プラタンマサート」のマハーサンマタは、王権の理念像を示していると考えられてきた [石井1975: 77-83など]。とすれば、ラタナコーシン朝においてこれが転輪聖王とされていたことも考慮すべきであろう。事実、同王朝の諸王は菩薩を自認するとともに、ときに転輪聖王に比されることもあったのである。それらの意味と、背景にある文献については稿を改めて論じることとしたい。

写本資料

PJ D: *Paññāsa-jātaka* palm-leaf manuscript (photocopy). (タイ国立図書館所蔵『パンニャーサ・ジャータカ』貝葉写本マイクロフィルム。田辺和子氏将来、大谷大学図書館所蔵 (M1/000070/D))

タイ語史資料

Chronicle of the Kingdom of Ayutthaya: the British Museum Version, Preserved in the British Library. Tokyo: Centre for East Asian Cultural Studies for Unesco, Toyo Bunko, 1999.

CKSNT: Narinthōrathēwī, Krommaluang. *Cotmāihēt khwām songcam khōng phraaco paīyikātē krommaluang narinthōrathēwī (caokhrōk wat phō) thangtē cō.sō. 1129-1182 pen wēlā 53 pī* (クロマルアン・ナリントーラテーウィー内親王回顧録：1767年から1820年までの53年). Bangkok: Ton chabap, 2003.

“Cotmāihēt rāiwan thap samai krung thonburī (トンブリー朝期行軍日誌).” *Prachum phongsāwadān* (年代記集成), lem 40. Bangkok: Khrusaphā, 1969, pp. 204-257.

Khamchan sansān phrakiat somdet phraphutthacaoliuang prāsāthōng (ブラサートトーン王陛下の名譽を讃える詩). Ed. by Buntūan Sīwōraphot. Bangkok: Krom sinlapākōn, 2002.

“Kham tang satecāthithān tō phrarattanatrai læ ralūkhūng phrarattanatrai talōtthūng phraasītimahāsāwok 80 (三宝に発願し、三宝の功德から八十声聞までを念じる文句).” *Prachum nangū kao* (古書集成), phākthī 1-2, Bangkok: Krom sinlapākōn, 2009 (1916), pp. 1-23.

KTSD: *Kotmāi trā sām duan* (三印法典), 5vols. Bangkok: Khrusaphā, 1994.

“Nirāt phrayā mahānuphāp pai müang cīn (ブラヤー・マハヌパーブの中国紀行詩).” *Wannakham samai thonburī* (トンブリー時代の文学), vol. 1, Bangkok: Krom sinlapākōn, 1996, pp. 369-383.

PAPC: “Phongsāwadān krung sī ayutthayā chabap phan chanthanumāt (cōem) (パン・チャントスマート本アユタヤー朝年代記).” *Prachum phongsāwadān*, phāk thī 64. Bangkok: Rōng phīm sōphonnaphipatthathanākon, 1956, pp. 1-437.

PRPTPC: “Phrarāitchaphongsāwadān krung thonburī chabap phan chanthanumāt (cōem) (パン・チャントスマート本トンブリー朝年代記).” *Prachum phongsāwadān*, lem 40. Bangkok: Khrusaphā, 1969, pp. 1-136.

PRPTMB: *Phrarāitchaphongsāwadān krung thonburī (somdet phraaco tāksin mahārāt) chabap mō bratlē* (ブラッドレー本トンブリー朝(タークシン大王)年代記). Bangkok: Samnakphim

khōsit, 2008 (1864).

Samutphāp traiphūm chabap krung sāyutthayā-chabap krung thonburī (アユタヤー版・トンブリ版三界経絵図), vol. 2. Bangkok: krom sinlapākōn, 1999.

Thammaprīchā: Thammaprīchā, Phrayā. *Traiphūmilōkawinitchayakathā chabap thī 2 (traiphūm chabap luang)* (三界決定論第2版 (欽定三界経)), 3vols. Bangkok: Krom sinlapākōn, 1973.

TPK: Lithai, Phayā. *Traiphūmikhathā rū traiphūm phraruang* (三界経あるいはプララン王の三界). Bangkok: Khurusaphā, 2002 (1974).

パーリ語史資料 (翻訳を含む)

Dasabodhisattupattikathā: The Birth-stories of the Ten Bodhisattasa and the Dasabodhisattupatikathā. Ed. and tr. by H. Saddhatissa. London: The Pali Text Society, 1975.

DBU: “Dasa-bodhisatta-uddesa. Texte pâli, publié avec une traduction et un index grammatical.” Ed. and tr. by François Martini, *Bulletin de l'Ecole française d'Extrême-Orient*, Tome 3, 1936, pp. 287-413.

Dīpavaṃsa. Ed. and tr. by Hermann Oldenberg. London: Williams and Norgate, 1879.

DN: *Dīghanikhāya*, 3vols. Ed. by T.W. Rhys Davids and J. Estlin Carpenter. London: The Pali Text Society, 1975-1982 (1890-1911).

DNA: *Dīghanikhāya-aṭṭhakathā (Sumaṅgalavīāsīnī)*, 3vols. Ed. by T.W. Rhys Davids, J. Estlin Carpenter and W. Stede. London: The Pali Text Society, 1968-1971 (1886-1932).

Hatthavanagallavihāraṃsa. Ed. by C. E. Godakumbura. London: The Pali Text Society, 1956.

Ja: *Jātaka (together with its Commentary)*, 6vols. Ed. by V. Fausbøll. London: The Pali Text Society, 1962-1964 (1877-1897).

『ジャータカ』: 中村元監修・補註『ジャータカ全集』10巻、春秋社、1982-91年。

LDS: Medhankara. *Lokadīpakasāra*. Bangkok: Krom sinlapākōn, 2006 (1986).

Lokapaññatti. Bangkok: Krom sinlapākōn, 1985.

Lokasaṅṭhānajatatanagaṇṭhī. Ed. and tr. by Bunlōet Sēnānon. Bangkok: Hō samut hæng chāt, 2000.

“Mahāsurasenajātaka.” Ed. by Takateru Hazuka. Shingyo Yoshimoto et al. (eds), *Paññāsajātaka: Thai Recension nos. 12-18, 22-39 Kept in the Otani University Library:*

Transliteration from Manuscripts in Khmer Script. Kyoto: Pāli Manuscripts Research Project, Shin Buddhist Comprehensive Research Institute, Otani University, 2004, pp. 48-59.

Mahāvamsa. Ed by Wilhelm Geiger. London: The Pali Text Society, 1958 (1908).

Pathamasambodhi. Ed. by Georges Cœdès; edition prepared by Jacqueline Filliozat. London: The Pali Text Society, 2003.

PJ, no. 7, 34, 46, 47: 畝部俊也編訳「タイ所伝バンニャーサ・ジャータカ第7, 34, 46, 47話—テキストと翻訳—」『タイ国ワット・ラジャシッタラム寺院他所蔵写本に基づく蔵外仏典の研究』2009～2011年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告、2012年、55～143頁。

ZP: *Paññāsa-Jātaka, or, Zimme Paññāsa (in the Burmese Recension)*, 2vols. Ed. by Padmanabh S. Jaini. London: The Pali Text Society, 1981, 1983.

その他の言語の史資料（翻訳を含む）

『阿毘達磨俱舍論』：『大正新脩大藏經』第29卷、大正一切経刊行会、1926年、1～159頁。

Eleven Mon Dhammasāt Texts. Ed. and tr. by Nai Pan Hla. In collaboration with Ryuji Okudaira. Tokyo: Centre for East Asian Cultural Studies for Unesco, Toyo Bunko, 1992.

『河僊鎮叶鎮鄭氏家譜』：陳荊和注釈「河僊鎮叶鎮鄭氏家譜注釈」『国立台湾大学文史哲学報』第7期、1956年、77～139頁。

Turpin: Turpin, François Henri. *Histoire civile et naturelle du royaume de Siam, et des révolutions qui ont bouleversé cet Empire jusqu'en 1770*, Tome 2. Paris: Costard, 1771.

参考文献

Appleton, Naomi, Shaw, Sara and Unebe Toshiya. 2013. *Illuminating the Life of the Buddha: An Illustrated Chanting Book from Eighteenth-century Siam*. Oxford: Bodleian Library.

Arthid Sheravanichkul. 2008. "Self-Sacrifice of the Bodhisatta in the Paññāsa Jātaka." *Religion Compass*, vol. 2(5), pp. 769-787.

Chaitongdi Phrachatpon. 2009. 「*Lokadīpakasāra*（世間灯明精要）の研究序」『印度學佛教學研究』第58巻第1号、(189)～(192)頁。

Chen Chingho. 1979. "Mac Thien Tu and Phrayataksin: A Survey on Their Political Stand, Conflicts and Background." *Proceedings, Seventh IAHA Conference, 22-26 August*

- 1977, *Bangkok*, vol. 2. Bangkok: Chulalongkorn University Press, pp. 1534-1575.
- Gesick, Lorraine Marie. 1976. "Kingship and Political Integration in Traditional Siam, 1767-1824." Ph.D. Thesis. Cornell University.
- Gesick, Lorraine. 1983. "The Rise and Fall of King Taksin: A Drama of Buddhist Kingship." Lorraine Gesick (ed.), *Centers, Symbols, and Hierarchies: Essays on the Classical States of Southeast Asia*. New Haven: Yale University Southeast Asia Studies, pp. 87-105.
- 彦坂千津子2012「タイ『三界経』における転輪聖王」『東海佛教』第57輯、(1) - (17) 頁。
- 石井米雄1975『上座部仏教の政治社会学—国教の構造』創文社。
- 石井米雄1999 (1987) 『三印法典』本「プラタマサート」の構成」同『タイ近世史研究序説』岩波書店、320 - 331頁。
- 伊東利勝1991「南伝上座部仏教圏における救世主と民衆反乱」石井米雄編『講座仏教の受容と変容2 東南アジア編』佼成出版社、197 - 240頁。
- 川口洋史2006「ラタナコーシン朝前期における文書処理システム—クロム・マハータイ (民部省) を事例として—」『史林』89巻6号、63 - 104頁。
- 川口洋史2015「『小暦1144年 (1782) における王族および官僚の叙任に関する協議書写し』テキストと訳註 —ラタナコーシン朝ラーマー一世王政権についての一史料—」『名古屋大学文学部研究論集 (史学)』61号、1 - 34頁。
- 北川香子2006『カンボジア史再考』連合出版。
- Jory, Patrick. 2002. "The Vessantara Jataka, Barami, and the Bodhisatta-Kings: The Origine and Spread of a Thai Concept of Power." *Crossroads: An Interdisciplinary Journal of Southeast Asian Studies*, vol. 16(2), pp. 36-78.
- Kobkua Suwannathat-Puan. 1988. *Thai-Malay Relations: Traditional Intra-regional Relations from the Seventeenth to the Early Twentieth Centuries*. Singapore and New York: Oxford University Press.
- 溝口雄三、池田知久、小島毅2007『中国思想史』東京大学出版会。
- 森祖道2015『スリランカの大乗仏教—文献・碑文・美術による解明—』大蔵出版。
- Nai Pan Hla. 1991. *The Significant Role of the Mon Version Dharmaśāstra*. Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa.
- Nithi Iaosiwong. 1980. *Prawattisāt rattanakōsin nai phrarāṭchaphongsāwadān ayutthayā* (アユタヤ朝年代記におけるラタナコーシン朝史). Bangkok: Bannakit.
- Nithi Iaosiwong. 1984 (1982). "Watthanatham kradumphī kap wannakam ton rattanakōsin (ラタナコーシン朝前期におけるブルジョワ文化と文学)." *Pākkai læ bai*

- riā: ruam khwāmriang wā duai wannakam la prawattisāt ton Rattanakōsin* (ペンと船：ラタナコーシン朝前期における文学と歴史に関する論集). Bangkok: Amarin, pp. 19-291.
- Nithi Iaosīwong. 2004 (1986). *Kānmüang samai phraçao krung thonburī* (トンブリー王時代における政治). Bnagkok: Sinlapawatthanatham.
- 岡野潔1998「インド正量部のコスモロジー文献、立世阿毘曇論」『中央学術研究所紀要』第27号、55-91頁。
- Prasert Na Nagara and Griswold, A. B. 1992. *Epigraphic and Historical Studies*. Bangkok: The Historical Society under the Royal Patronage of H.R.H. Princess Maha Chakri Sirindhorn.
- Sāichon Wannarat. 1982. "Phutthasātsanā kap nāēokhit thāng kānmüang nai ratchasamai phrabātsomdet phraphutthayōtḥāculālōk (phō.sō. 2325-2352) (プラプッタヨートファーチャーローク王時代 (1782-1809年) における仏教と政治思想)". M.A. Thesis, Chulalongkorn University.
- Sāichon Sattayānurak 2003. *Phutthasātsanā kap nāēokhit thāng kānmüang nai ratchasamai phrabātsomdet phraphutthayōtḥāculālōk, phō.sō. 2325-2352* (プラプッタヨートファーチャーローク王時代 (1782-1809年) における仏教と政治思想). Bangkok: Maticchon.
- スキリング、ピーター (畝部俊也訳) 2004「東南アジアに於けるジャータカとパンニャーサジャータカ」『大谷大学真宗総合研究所紀要』22、11-74頁。
- Skilling, Peter. 2007. "King, Sangha and Brahmins: Ideology, Ritual and Power in Pre-modern Siam." Ian Harris (ed.), *Buddhism, Power and Political Order*. London and New York: Routledge, pp. 182-215.
- Skilling, Peter. 2009. "Manuscripts and Inscriptions, Language and Letters." Claudio Cicuzza (ed.), *Buddhism and Buddhist literature of South-East Asia: Selected Papers*. Bangkok: Fragile Palm Leaves Foundation, pp. 1-16.
- Skilling and Santi Pakdeekham (eds.). 2002. *Pāli Literature Transmitted in Central Siam: A Catalogue Based on the Sap Songkhro*, Bangkok: Fragile Palm Leaves Foundation.
- 杉本卓洲1980「南方上座部の菩薩について」『論集』第7号、1-17頁。
- 杉本卓洲1993『菩薩—ジャータカからの探求—』平楽寺書店。
- Sunait Chutintaranond. 1990. "Cakravartin: The Ideology of Traditional Warefare in Siam and Burma, 1548-1605." Ph.D. Thesis, Cornell University.
- Suphāphan na Bāngchāng. 1990. *Wiwatthanākān wannakhadī bālī sāi prasuttantapidok thī tāng nai prathēt thai* (タイ国内で編纂された経蔵系パーリ語文献の発展). Bangkok:

Chulalongkorn University.

Tambiah, Stanley Jeyaraja. 1976. *World Conqueror and World Renouncer: A Study of Buddhism and Polity in Thailand against a Historical Background*. New York: Cambridge University Press.

田辺和子1981「タイに伝わる『パンニャーサ・ジャータカ』(50ジャータカ)、『仏教学』第11号、65-88頁。

畝部俊也2013「パンニャーサ・ジャータカに説かれる捨身の目的—「声聞、独覚の栄達(sampatti)を求めず」をめぐる—」、『名古屋大学文学部論集(哲学)』59号、1-23頁。

Wyatt, David K. 1994 (1982). "The "Subtle Revolution" of King Rama I of Siam." David K. Wyatt, *Studies in Thai Studies*. Chiang Mai: Silksworm Books, pp. 131-172.

藪内聡子2009『古代中世スリランカの王権と佛教』山喜房佛書林。

山崎元一1990「古代インドの王権論—仏典と『実利論』を史料として—」、『東洋文化』73、1-39頁。

注

- 1 *Th.* タイ語、*Skt.* サンスクリット、*Pl.* パーリ語を意味する。
- 2 布施、持戒、施捨、正直、温和、努力、不瞋恚、不加害、忍辱、不争を指す[Ja, vol. 2: 118, 367, 400-401など]。
- 3 Sāichon 2003. 同書は氏の修士論文 [Sāichon 1982] を出版したものである。
- 4 『三界経』については本文で後述する。
- 5 プラヤー・タンマブリーチャー (ケーオ) が1802年に上梓した仏教宇宙論書。サーイチョンは菩薩の意味のみならず、ラーマー世王時代の統治理念を同書に読み取ろうとする。
- 6 サーイチョンもそのことに触れてはいる [Sāichon 2003: 211]。しかしタークシンが転輪聖王と菩薩を自認していたとすると、トンブリー時代に「呪術的」で「超自然的」な仏教が好まれていたから転輪聖王思想が重視されたが、ラタナコーシン朝に入るとそうではなくなったため、転輪聖王ではなく菩薩王が好まれた、という氏の理解と対立するように思われる。
- 7 Nithi 1980: 17-20. タークシンを貶めるとともに、のちの一世王を露骨に賞賛するようになるのは、パラマヌチット本 (二冊本、ブラッドレー本) からである。
- 8 DN, vol. 3: 58-79. パーリ仏典に見られる転輪聖王像については山崎 [1990] に詳しい。そのほか、石井 [1975: 77-83]、Tambiah [1976: Ch. 4] も参照されたい。

- 9 PAPC: 222-223. “ข้าพเจ้าหาที่พึ่งมิได้ จะขอเอาพระเดชเดชาญาณภาพพระบาทสมเด็จพระพุทธเจ้าอยู่หัว อันมีพระบุญรามีพระเกียรติยศอิทธิกรมทิวา ดูกหนึ่งสมเด็จพระเจ้ามันธาดุราชจาตุรคทปิจักรพรรดิ อันมีพระราชเสาวราฎุทธิ อาณาจักร แผ่ไปใหญ่ไพศาลใหญ่ทั้งสี่ มีทวีปน้อย ๒๐๐๐ เป็นบริวาร เป็นถักรแก้วกั้นเกษ จะขอกองทัพยกไปช่วยกัน เมือง”
- 10 パン・チャンタヌマート本は1795年に改訂された際に、16世紀のビルマとの戦いの記述が増広されている [Nithi 1980: 17-18]。
- 11 タークシンの勢力拡大については、Gesick [1976: Ch.2] を参照。特にハーティエンとカンボジアについては北川 [2006: 161-164, 176-179] に依った。
- 12 後述する1775年5月30日（小暦1137年7月白分1日）付の宰相の書簡 (suppha-aksōn) の控えに、正文に大獅子印 (trā prarātchasi yai) を捺し、袋に入れて口を小獅子印 (trā prarātchasi nōi) で封じたと記録されている [CKSNT: 572-573]。そのため、ここにおける宰相とは獅子印の持ち主である民部大臣 (samuhanāyok) [“Phrathammanūn.” KTSD, vol. I: 174-175] であったと考えられる。なお suppha-aksōn については、アユタヤー・トンプリー時代とラタナコーシン朝では機能が異なっていた [川口2006: 72-78]。
- 13 CKSNT: 556. “อันพระเคยเดชาญาณภาพทุกวันนี้ก็อุประค้ำยวิษยาคูณ ปัญญาคูณ อุบคชา ประคุดหนึ่งทรงจกแก้ว พระขันทแก้วขามเสยซึ่งทาวพระฉนวนหาระมัศร ไนสกลขมภูทวิป สาอไรแก่งกรุงรัตนอังวะ ปรการโลที่ใหญกว่า กรุงรัตนนุระอังวะกลิจจะพระไทยแล้ว เหนไม่พ้นเจอมพระหัยษุ บัดนี้หมายพระไท อาจขึ้นไปเอากรุงรัตนนุระอังวะ มาได้ปนชั่ง” 提示した訳は試訳である。また、Gesick [1976: 97-98] に引用箇所を含めた英訳があるが、一部語句が訳されていない。
- 14 ここでは金、銀、瑠璃、水晶などの貴金属・宝石類を指す。
- 15 “อุครกาโรราชกรรญา” は“อุครกูราชกัญญา” に修正した。“กัญญา” は「興」とも訳しうる。しかし1771年から75年における書簡のやりとりのなかで、シリブンニヤサーンの娘をタークシンに嫁がせることが話題のひとつになっていること [CKSNT: 552, 587-589] を鑑みて、本文のように訳出した。
- 16 CKSNT: 568-569. “ปางก่อนพม่ายังไม่มาเข้าี นครศรีอยุธยาขับพระมหานครศรีรัตนคนหุดครั้งนั้นเป็นเอกร่วมพฤชพลบดีกลตั้งสุวรรณรัชตะแกมแก้วงาม เป็นอันหนึ่งอันเดียว ฝ่ายของกผู้เป็นปิ่นกมกฎพระนครถาวรประคุดตั้งบรมจักรพรรดราธิราช ฝ่ายนารถบิจามเขมิกกอบระค้ำยแก้วแหวนแสนสัดพิรัตนะราชทรัพย์ทั้งปวง ประคุดหนึ่งอุครกาโรราชกรรญามาสมักสโมษกรองกิสทั้งสี่ เหมือนหนึ่งมีเสวตรจักรกวางกั้นกอบระค้ำยจักรกลโยธาชุ่มเขอนไปทั่วทิศานุทิศ ครั้นใกล้ถึงเข็นก็ไปจนเสยพระนครศรีอยุธยาสิ้นพระวงษา”
- 17 年代記ではタークシンの身体は三十二相のうち十二と一致したという [PRPTPC: 120-121]。これも彼が転輪聖王に近い存在であったことを示すエピソードである [Cf. Gesick 1983: 100]。

- 18 アショーカ王が瞻部洲を支配した転輪聖王とする史書として『島史』がある [Dīpavaṃsa: Ch. 6, vv. 22-23]。
- 19 本書の概要と重要性については Chaitongdi [2009] を参照。
- 20 *Samutphāp traiphūm chabap krung sīayutthayā-chabap krung thonburī*, vol. 2. 1999. この絵図はリタイの『三界経』とは系統を異にする [Skilling 2009: 11]。
- 21 史料によって、*Th. phōthiyān* < *Pl. bodhiñāṇa*, *Th. samphōthiyān* / *somphōthiyān* < *Pl. sambodhiñāṇa* とも記されるが、すべて「菩提智」という訳語を充てる。
- 22 菩薩が実践する徳目。転じてタイ語では徳目の実践によって集積した「威徳」の意味にも用いる。
- 23 PAPC: 298-299. “เป็นธรรมชาติอยู่แล้ว อุปมาเหมือนหนึ่งท่านบรมโพธิสัตว์เป็นนายสำเภา คนทั้งหลายโดยสารไปค้าใช้ไปถึงท่ามกลางพระมหาสมุทรต้องพายุใหญ่ สำเภาจะอัปปางอยู่แล้ว บรมโพธิสัตว์จึงว่าถ้าฉันอยู่ตรงนี้ ก็พากันตายเสียสิ้นทั้งสำเภา เจึงตั้งศรัทธาฐานว่าถ้าอาตมาจะสำเร็จแก่พระบรมโพธิญาณ ขออย่าให้สำเภาอัปปางในท้องพระมหาสมุทรเลย เศษอนุภาพพระบารมีบรมโพธิสัตว์ สำเภาก็มีได้ฉลากล แล่นล่องถึงประเทศธานีซึ่งจะไปค้าก็เหมือนการอันเป็นครั้งนี้ ถ้าหัวภรรยาฉันนี้ตายคนทั้งหลายก็จะพลอยตายด้วย ถ้าหัวพระภรรยาฉิบการรอดจากความตาย คนทั้งปวงก็จะรอดด้วย”
- 24 PAPC: 299. “เจ้าพเจ้าปรารถนาพระโพธิญาณ ถ้าจะเสร็จแก่พระพุทธสมมติเป็นแน่ จะยกเข้าไปล้างผู้่อ้างขอให้สำเร็จดังปรารถนา”
- 25 PRPTPC: 75. “จึงตรัสประกายถามพระสงฆ์ว่า พระผู้เป็นเจ้าของเจ้าได้หรือไม่ เมื่อโยมยังอยู่บ้านระแหง โยมยกระฆังแก้วขึ้นชูไว้กระทำให้ศตยนิชฐานเสียงพระบารมีว่า ถ้า ๆ ข้า ๆ จะได้ศรีตแก่พระปรมาภิเษกสัมโพธิญาณในอนาคตกาลเป็นแน่ ๆ ข้า ๆ ศิระฆังแก้วเข้าบัดนี้ให้ระฆังแก้วแตกจำเพาะแต่ที่จัก จะได้ทำเป็นพระเจดีย์ฐานแก้วบรรจุพระบรมสารีริกธาตุ ครั้นอธิษฐานแล้วดีเข้า ระฆังแตกจำเพาะแต่ที่จัก ก็เห็นประจักษ์เป็นอัศจรรย์ครั้งหนึ่ง พระสงฆ์ถวายพระพรว่า จริตังพระราชโองการ” Jory [2002: 53-54] と Skilling [2007: 189-190] に英訳が見える。
- 26 *Ja*, vol. 1: 64-65. 『ジャータカ』1: 74-75. ちなみに『パタマサンボーディ』では左右の手が逆になっており、18-19世紀シヤムの仏伝絵写本や壁画でもそのように描かれている [Paṭhamasambodhi: 85; Appleton et al. 2013: 69, 71]。
- 27 *Ja*, vol. 1: 70. “sac’ āhaṃ ajja Buddhho bhavitum sakkhissāmi ayaṃ pāti paṭisotaṃ gacchatu, no ce sakkhissāmi anusotaṃ gacchatū.” 『ジャータカ』1: 81. Cf. *Paṭhamasambodhi*: 107.
- 28 Coedès, George. “An Indochinese Life of the Buddha: The Paṭhamasambodhi.” [Paṭhamasambodhi: lv-lxvi] および Suphāphan [1990: 157-159] を参照。
- 29 PRPTPC: 19. “แล้วพระราชทานเงินตราอาหารแก่สัปหรือ ให้สิ้นซากศพคนอันคอดอยากอาหารคายนั่นเสียด

- แล้วพระราชทานบังสกุลทาน และพระราชทานเงินตราอาหารแก่ยากฉิบหายในเมืองชลบุรีเป็นอันมาก แล้วอุทิศ
 ถิ่นป่าพระราชทานกุศลให้แก่หมู่ประชาไปนปโรคนั้น เพื่อจะเป็นปัจจัยแก่พระปรมาภิเษกสัมโพธิญาณ”
- 30 註46参照。
- 31 PRPTPC: 33. “ถ้าพระผู้เป็นเจ้าทั้งปวงมีศัลลคุณบริบูรณ์ในพระศาสนาแล้ว แน่นจะปรารถนามังสระจระโยม โย
 มก็อาจสามารถจะเชือดเนื้อและโลหิตออกบ้างเพื่อกินได้”
- 32 “Cotmāihēt rāiwan thap samai krung thonburi.” : 229. “จึงทรงพระสัถยธิษฐานสาบาน ต่อหน้าพระ
 อาจารย์วัคเชิงหวายพระสงฆ์หลายรูป ว่าเป็นความสังแห่ง ฯ ข้ำ ฯ ทำความเพียรมีศีลคิดแก่กายและชีวิตทั้งนี้ จะ
 ปรารถนาสมบัติสถานอันใดหามิได้ ปรารถนาแต่จะให้สมณชีพรามณ์สัควโลกเป็นสุข อย่าให้เบียดเบียนกัน ให้
 ตั้งอยู่ในธรรมปฏิบัติ เพื่อจะเป็นปัจจัยแก่โพธิญาณสิ่งเดียว ถ้าและผู้ใดอาจสามารถจะอยู่ในราชสมบัติ ให้สมณ
 พราหมณ์ประชาชาฎฐเป็นสุขได้ จะยกสมบัติทั้งนี้ให้แก่บุคคลผู้นั้น แล้ว ฯ ข้ำ ฯ จะไปสร้างสมณธรรมแต่ผู้เดียว ถ้า
 มิฉะนั้นจะปรารถนาสิริยศแลยศศักดิ์สิ่งหนึ่งสิ่งใดก็จะให้แก่ผู้นั้น ถ้าและมีสังจะนี้ ฯ ข้ำ ฯ มุสาวาท ขอให้ตกไปยัง
 อวายุภูมิเถิด”
- 33 中部タイに伝わる同文献については、田辺 [1981] を参照。
- 34 Arthid 2008: 776-779. また畝部 [2013] も参照。
- 35 “Mahāsurasenajātaka.”: 53; PJ D: phūk 9, thū v-the r. “bhonto devasaṃghā
 passantā mama paricāgaṃ iminā paricāgena cakkavattisampattiṃ na paṭṭhemi
 na chakāmāvacarasaṃpattiṃ na brahmasampattiṃ paccekabuddhasampattiṃ na
 paṭṭhemi api ca kho pana sabbalokahitakaraṇassa sabbañuṭañāṇassa paccayo hotū.”
 和訳は畝部 [2013: 6-7] を一部改めたものである。ZP [vol. 2: 342-343] では「独覺の
 榮達」を欠く。
- 36 のちに帝釈天の力によって王は生き返る。
- 37 “Siricuddhāmaṇi-jātaka.” PJ D: phūk 5, ṇaṃ v; PJ, no. 7, 34, 46, 47: 62, 70 (和訳).
 “aham ajjhattikadānaṃ dātukamo 'mhi. yācakā bhīrakadānaṃ yācanti. sace yo
 ajjhattikadānaṃ yācati cakkhaṃ vā sīsaṃ vā hadayaṃ vā maṃsaṃ vā lohitaṃ vā
 aḍḍhasariraṃ vā sakalasariraṃ vā taṃ taṃ sabbañuṭañāṇassa paccayaṃ katvā tassa
 dadeyyan.” ZP [vol. 1: 200] では「頭」を欠く。
- 38 『十菩薩説示』は『未來史 (Anāgatavaṃsa)』と一体になっているため、シャムでは前
 者もまとめて後者の名で呼ばれるのが一般的であった。
- 39 DBU: 306. “‘bhante evaṃ tumhesu sabbadhammesu ekaṃ nibbānaṃ antaṃ
 desentesu, aham pi pūjāvisesaṃ pūjemī’ ti vatvā sīsaṃ nakhena chinditvā,
 hatthatale thapetvā sīsaṃ.”
- 40 DBU: 307, 312-313, 325-326, 332-333. ちなみに『バンニャーサー・ジャータカ』と異なり、

- 彼らは蘇生することなく死ぬ。内容を同じくする『十菩薩誕生物語』の概要については、杉本 [1993: 199-201] と森 [2015: 102-107] を参照。
- 41 Prasert and Griswold 1992: 516, 519. 同論文では碑文テキストの「十菩薩」を「十波羅蜜」に修正すべしと主張するが、その必要はない。
- 42 *Khamchan sansaen phrakiat somdet phraphutthacaoliang prāsāt thōhng*: 84-85. Skilling [2007: 189] も参照。
- 43 “Kham tang satcāthithān tī phrarattanatrai læ ralūkhūng phrarattanatrai talōtthūng phraasīmahāsāwok 80.” [12-13] と DBU [334] を比較されたい。ただし両者には違いもある。
- 44 現在の度量衡では1タン=20リットル。
- 45 PRPTPC: 29-30. “จุดศักราช ๑๑๓๐ ปีชวดสัมฤทธิ์ศก ทอดพระเนตรเห็นอัญญิกรเวฬุคนทั้งปวงอันถึงพิบัติชีพ ด้วยด้วยทุกข์ทมิฬ โจระ โจระ สมกองอยู่คู้หนึ่งภูเขา และเห็นประชาชนซึ่งลำบากคอกอาหาร มีรูปร่างคู้หนึ่งเปรตปีศาจฟิงเกลียด ทรงพระสังเวชประค้อมพระหทัยเหน้อยหน้าในราชสมบัติจะเสด็จไปเมืองจันทบุรี จึงสมณพราหมณาจารย์เสนาบดี ประชากรราษฎรชวกรับกราบทูลอาราธนาวิงวอน สมเด็จพระพุทธเจ้าอาหาหัวพระบรมหน่อพุทธางกูรคร้ตเห็นประโยชน์เป็นปัจฉัยแก่พระปรมากิเยกสมโพธิญาณนั้นก็รับอาราธนา จึงเสด็จยับยั้งอยู่ ณ พระตำหนักเมืองจันทบุรี
- จำเดิมแต่นั้น ด้วยกำลังพระกรุณาพระราชอุคสาหะในสัควโลกและพระพุทศาสนา มิเป็นอันที่จะบรรทมสงสวายเป็นสุขด้วยพระราชอิริยาบถ ด้วยคิดขี้ดวงสา สมณาจารย์เสนาบดีอาพาประชาราษฎร ขากวณพิทกคนโซอนาถาหัวทุกเสมามณฑล เกลื่อนกล่นกันมารับพระราชทานมากกว่า ๑๐๐๐๐ ฝ่ายข้าราชการทหารพลเรือนไทยจีนนั้นรับพระราชทานข้าวสารเสมอคนละถัง กินคนละ ๒๐ วัน”
- 46 PRPTPC: 23-24, 25, 28-29, 30-31, 38, 44-45, 47-48, 59, 62, 64, 67, 68, 72, 73, 114-115.
- 47 当然ながら、菩薩王としてのタークシンは、シャム人、モン人、ラーオ人といった上座部仏教徒の臣民に向けた姿であった。一方華人にとって、彼は潮州華人のリーダーであった [Chen 1979]。また、ハーティエンにおいてベトナム寺院を庇護した [*Chronicle of the Kingdom of Ayutthaya*: 568v-569r; “Cotmāihēt rāiwan thap samai krung thonburī”: 250-251] のは、ベトナム人臣民に向けた姿であったのだろう。このようにタークシンは、同時代の清朝皇帝がそうであったように、様々な臣民に向けて、それぞれに合わせた姿を見せていたものと思われる。ただし、華人が彼の布施行を、明末清初から見られた、流民の救済などを含む勸善的な道德実践 [溝口など2007: 187-199] と見なしていた可能性はある。あるいは、タークシンがそのような思潮をもった華人であったからこそ、シャム仏教のなかから特に利他行を取り出し、強調するに至ったのかもしれない。

- 48 「プラタンマサート」については石井 [1999(1987)] を参照されたい。
- 49 現在の劫のこと。
- 50 KTSD, vol. 1: 10. “ครั้งนั้นสมเด็จพระบรมโพธิสัตว์เจ้า ได้มาบังเกิดเป็นพระมหานุรุชในดินพัททกัลป ครั้นอยู่มากก็เกิดวิเวทแก่กัน หาผู้ใดจงบังคับบัญชามิได้ ผู้ชนทั้งหลายมาสะโมสรประชุมพร้อมกัน จึงตั้งสมเด็จพระมหานุรุชราชเจ้าขึ้นเป็นอธิบดี มีพระนามกรชื่อว่าพระเจ้ามหาสมมุติราช กอบไปด้วยสัตนะพิธรัตน ๘ ประการ ได้ผ่านทวีปทั้ง ๔”
- 51 Thammaprīchā, vol. 1: 71. “มากไปด้วยเดชานุภาพอาจที่จะปราบปรามทั่วทุกประเทศภูมิณฑล”
- 52 *Lokasaṅghānājataratanagaṅṅhī* [153] と LDS [509-510] とを比較されたい。